

## 第三十九章

島崎君は『春』を書き、『家』を書き、『壁』を書き、『苦しき人々』を書いた。その他にもすぐれた短篇を二三発表した。

正宗白鳥氏はこの時代においては、既に立派な新しい時代の作家であった。『紅塵』『二階の窓』あたりで世に認められて来たかれは、『二家族』を書き、『何処へ』を書き、『落日』を書いた。少なくともかれは新しい時代の作家、旧派に何の縁故も関係も持っていない作家という意味で、当時の文壇に重きを為した。

かれの話では、かれは旧派の作品に接しないことはなかったのであるけれども、しかもどれもこれも際立ってかれの心を惹いたものはなかったということであった。紅葉にも天外にも柳浪にもそう感心しなかったということであった。かれはその時代において唯一つ感心したものがあったが、それはその当時の日本の作ではなくて、ロシアのレルモントフの『現代の英雄』、しかもそれを鷗外きみ子の共訳した「浴泉記」であったということであった。そしてそれに比べて日本の小説のいかにつまらないかを考えさせられたということであった。かれはそれから国木田の『独歩集』に行った。そしてそこで多少の共鳴を感じた。こういうのが小説なら、俺にも書けないことはないと思った。しかしかれは早稲田を出てから三年近くも新聞記者の中にかくれて日を送った。安翻訳などをもやった。劇評家となつてゐることもあった。かれが『旧友』という最初の作を『新小説』に発表したのは、抱月氏が海外から帰つて来る前後のことであつたように私は記憶している。

従つてかれの作には、旧派の面影は少しもなかった。文字のつかい方や、字句の並べ方などにも全く新しい時代の形式があつた。そういう意味だけでも、かれは新しい文芸のチャンピオンたるに値した。

岩野泡鳴氏もその頃頻りに小説を書き出した。かれも新しい作家として世に生まれ変わろうとしたひとりである。幸いなことには、かれは詩人としてはかなり旧い人であつたに拘らず、小説作者としては、天外や風葉のようにわるく旧派に染みていなかった。それに、まだ世間に出ていなかったということが、非常にかれに有益な結果を持ち来らせることとなつた。かれもまた新しい時代の作家として立つて行くことが出来た。

しかし、かれの作は評判が好くはなかった。あちこちの雑誌に出るには出て、大して人の目を引かなかつた。『岩野の小説は、ちょっと困るな！』こう誰も彼も言った。

しかしかれは負けてはいなかつた。益々新しい時代の人らしい奮闘をつづけて行つた。『僕の小説は旨いか拙いかという技巧上のことではないんだよ。もっと先だよ。もっと先のところまで行つてゐるんだよ。それがわからないんだから困る！』成るほどかれの作には、他の新しい作家に比して、著しく深く掘つたようなところのあるのは争われ

ない事実であった。また人生の醜悪な点、暗黒な点、そういう方面に向っても、他のあらゆる作家より思い切った描写をしていることも争われない事実であった。従って、読者の頭に素直に入って行かずに――すぐ反発されてしまうのも、そういう極端な、醜悪といえは醜悪な描写が多いからであるとも言えないことはなかった。

かれは『耽溺』を『新小説』で発表した。これは今日でもすぐれた作であるということが出来た。いかにもその時代の新しさに相応しい作であった。秋声氏なども推奨の言葉を惜しまなかった。

この作の出る半年ほど前に、風葉の作に同じ名の作があったが、それを比較して見ると、新しい旧いという区別がよくわかった。新しい文芸がその出て来る新しい氏名を必然に持っていたという事がよくわかった。泡鳴の『耽溺』には少しも遊戯気分がなかったのに比して、風葉の作には、わるく気取ったようなところだの、キザなようなところだの、わるく人に見せつけるようなところだのがあった。一目して何方が本場で何方が鍍であるかということがわかった。

その時代のモットーとしては、つとめて真面目であるという事は必要であった。泣きたくとも齒をくいしばって泣かずにいるというような心持、どんな苦しみにも悩みにも堪えて行こうというような心持、感情には捉われまいという心持、どんな巴渦の中に入っても、たとえば火と水の中に入っても決してそれに溺れまいという心持、歓楽を歓楽として見ずに、唯、真面目に本当に見ようという心持――そういう心持がその時代の作者の胸に著しく際立って渦を巻いていた。それにしてもそういう心持は何処から来たかというのに、それは主としてヨーロッパの新思潮から来たのであった。ニーチェから、トルストイから、ゾラから、モーパッサンから、ドストエフスキーから、チャーホフから、ストリンドベリから、イブセンから、マックス・シュテイルナーから、アルノー・ホルツから、ゲアハルト・ハウプトマンから……。

白鳥氏のもは、同じ主観にしても、ぐつと態度がその材から離れて来ていた。その結果としては皮肉には皮肉だけれども――またその皮肉にもその時代の皮肉らしさがあつたけれども、岩野のものに比べては、真面目らしさが、本当らしさが余程変わった形になってあらわれているのを私は見た。皮肉な笑い、またはじろじろと傍観したような無気味さは泡鳴の作中にはその面影すらも認めることは出来なかった。

白鳥氏が聡明な傍観者らしく、泡鳴氏が愚かなエゴイストらしく見えるのは、そういう態度から来ているのではないだろうか。

とにかく、そういうことはおいて、岩野はその頃非常な苦境に身を置いていたことは事実であった。かれは家庭でも戦い、世間でも戦い、文壇でも戦った。ことに樺太に出かけて行くあたり、樺太から北海道に来てどうにも出来なくなつて行つたあたり、あの時分のことは、『放浪』『発展』あの二つの作に詳しく書いてあるが、あの二つの作は芸術としてはそう重きを置くことは出来ないものであるけれども、しかし新しい

時代の人として、いかに勇ましく、またいかに無節制に、無技巧に、時には愚と思われ  
るまでに大胆に世に処したかということが子細にそれと指さされて見えるのは、面白い  
事実として特記しなければならぬものであった。『悲痛の哲理』という一文は、多いか  
れの論文の中でも、ことに立派な、注意すべきものの一つであるが、それはかれが北海  
道から飄零落魄ひょうれいらくはくして帰って来た時に、『唯、それ一つだけを持って』来たものであった。  
私はそのとき新しい勇ましいドンキホーテを初めてそこに見たような心持がした。

白鳥、泡鳴二氏の向うに秋声氏がいた。かれも真面目に短篇を書いた。暗い、ジミな、  
陰気なものが多かったけれども、それが却って当時の気分にあったらしく、その評判も  
決してわるい方でなかった。

そういう作者達に対して、私自身はその古さを、その甘さを、またはその感情に捉わ  
れすぎているのを深く恥じずにはいらなかった。私は心では、感情では、知識では、  
その新しい時代を十分に知ってはいたけれども——どうかして自分もそういう風に出て  
行かなければならないと思っていたけれども、しかも容易にそういう境に出て行くこと  
が出来なかった。私の性情がいつも私の出て行くのを遮った。今日になって考えて見た  
ところでは、『生』を書いてしまった後でも、まだ本当に私は文体ということをつかんで  
いなかった。

それに、何方かと言えば、日本はまだロシアやフランスの持ったような実際の人間を  
沢山に持っていなかった。古い古い時代がまだ至るところにその力を振っていた。官僚  
も威張っていたし、師弟などという関係もやかましかったし、旧道徳で事物を判断して  
行くような傾向も衰えなかったし、何処を見わたしても、平凡な旧式な人間ばかりで、  
新しい感じのする人達などは何処にも見出すことが出来なかった。『生』マを書いたために、  
私は一面では、許すべからざる忘恩漢か何ぞのように言われた。

※本文の表記は、常用漢字・新かな遣いに改めた。

※出典『近代の小説』第三十九章 大正12年2月18日